

# COSMOS集



## 自転車と俺

松井竜也\*茨城

「あすなる集」特選

信号が鼓動で俺が血液で寝起きの街に自転車を駆る  
できるだけパーツ減らして鳥の骨のような形の黒き自転車  
通勤のサラリーマンをすり抜けてまだ間に合うかあの青信号  
落ちてゐる小枝を跳んで避けながら自転車と俺が加速していく  
自動車を追い越す度に少しずつ大きくなってゆく自転車は

## 黄金の穴

塚原明子 愛知

秋深みからくれなるの山肌にしるがねの滝垂るる帯となる  
濁きたる夜空をまるく割り貫いて黄金の穴より真光のさす  
霜月に「コスモス」十二月号の届きて歌の暦は終はる  
すき透る月の光をふくみ抱きおよぐ水母は海中の華  
十八年待ちし小説の新刊を老眼鏡に楽しむ夜長

## 漬れ鳥

寺田 静\*神奈川

母島に乳房山なる甘美あり惚けていたしそに抱かれて

漬れ鳥 緋のこぼれたる霜月の路面に雨はやわらかく降る  
永遠におまえは黒き服を着て働け世界の影のごとくに  
稲びかり一瞬夜に竜がいてわれの背骨を見つめていたり  
滑空のからすの足の脱力のごときひと日を終え靴をぬぐ

## 点きつ放し

村上京子\*長崎

絶妙な日向ぼつこの立ち位置に流石と褒める野良猫Aを  
玄関の人感センサー狂い出し点きつ放しの電源を切る  
喪服数珠黒のバッグとパンプスと襷紗と香典忘れないこと  
新しいニュースが流れその代わり古いニュースを忘れゆく日々  
何につけアドレス登録させられて未読メールであふれるポックス

## 榕樹

義原 富喜子 鹿児島

卓球の手ほどきせしは我なれど大敗したり甥つ子二人に  
不登校、飛び降り自殺わかき等のガラスのごとき心憂ふも  
亡き姑の興しし島の短歌会「榕樹」根づきて五十年なり  
門人の贈りし芭蕉を号にせし俳聖芭蕉に親しみ覚ゆ  
ふるりと坊主頭に生え出たる蘇鉄のわか葉色つやよろし

## 涙の秘話

大越 巖 福島

ツヨカワの十さい仲邑董ちやん男性棋士に四連勝す  
漢字でもじわり姿が浮かびくる蛇口に蛇の目、蛇腹が怖い  
イケメン。でも蛇顔と子が言ひしの高良健吾は記憶にのこる  
山里の涙の秘話がありさうな千枝子峠の名におもひ寄す  
太平洋のぞむ勿来に見る日の出まこと海よりひと日始まる

大豆の莢 園田 由美子\*熊本

点描のごとき黄葉色増して大豆畑に秋の日暮れぬ  
葉の落ちて大豆の莢の露わなり「ハハ」「ハハハハ」の片仮名に似て  
散文のごとき秋の日病院の母の着替えを部屋干しにする  
初霜の阿蘇の草原 馬の群れ時の流れにすつくと立てり  
北へゆく雁金のさま見送るに土色は濃き荒起こしの田

終バス 一ノ宮 陽子 鳥取

日焼けせる老婆の吊す干柿の整然として霜月に入る  
ものなべて秋雨のなか麻酔にて眠れる夫の寢息の聞こゆ  
一人降りまた一人降り終バスの広き空白ひとり占めする  
ヒヨドリのこゑにまじりて山鳩のひくき声する明け方の空  
露草に露を置きたるひそけさにけふのひと日は無口であらう

秋祭り 三枝 佳子\*静岡

弟の護る社の秋祭り夜の静寂しじまに大太鼓響く  
海渡る潮風と共に聞こえる村の社の祭りの太鼓  
早生みかんの売り出し示す旗がたつすすきの穂ゆれる秋のみちべに  
大きなる喚声上がるその中に柱くぐりする外国人おり  
小春日に春日大社を参拝す晴着の親子の列続くなか

避難民われ 本田 初江 群馬

難破船がたどり着くと体育館の灯にほつとす避難民われ  
いつの間にか蓄をしつかり抱へある石路は父 命日近し  
目を細め父が奥つ城にゐるやうな女七人賑やかな暮参

賑やかな家族総出の芋ほりが詰まりて届く泥付きの薩摩  
不安感を煽るがごとし行員の認知症保険勧誘テクニク

ほんま、ほんま 栗屋 喜代美\*兵庫

学童ら三十人中六人が左ききなりそれに驚く  
幼き日に左利きだった弟は良く叱られた右手を使えと  
我の事を外でおばはんと呼んでるらしい夫にちよっぴりムカついている  
ほんま、ほんまと合つち打ちつつ頭でははてなマークがチラリと浮かぶ  
口紅を一本買っただけなのに何だかときめく旅に出たいよ

各駅の旅 浅田 みどり\*東京

おさんぽの保育園児に手を振られ我孫子駅たつ各駅の旅  
レンコンの産地なるべし神立かみたちを過ぎて車窓に蓮田のつづく  
内堀町亀宗かめむね呉服屋健在なり娘のような母を見し店  
霧隠れ七時一分のバス通るあのバスに乗り明日帰ろう  
元麻布ヒルズを幼は怖がりて抱っこをせがみ肩に顔伏す

ピロピロ 永松 たづ子\*大分

垂直に落ちしか熟柿は末期なる火の色をして土の上にあり  
霜月の一寸の守宮やもり白みおびピロピロくねりて繁みに入りぬ  
身の痛み消ゆればうれしと死にゆける時を知りつつ叔母は逝きたり  
死して尚母の面影おもわせる小さき願叔母逝きたまう  
寺庭に拾う蘇鉄の実を二つバッグにおさめ故郷をあとにす

集落葬 菊山 正史\*広島

納屋隅に蜘蛛の巣の張る法律書身を立つるなくふるさとへ帰り

わが里の最後となった集落葬霜柱踏み棺を担ぐ

つきだしはわが家で押しした鮎の寿司昭和を歌う村宮酒場  
遠くいた五十年を埋めたい認知症の母に独りごちたる

稜線を遙かにのぞむ通学路通う人なく雪折れの竹

セラピー弁当 三浪 治子 三重

大洞山の裾野の桜公園にセラピーウォーク百人集ふ

地元食材卵こんにやく、天魚詰め杉茸飯のセラピー弁当

長雨の後の山道土滑り足置く位置を考へ登る

霜月の西日を指してひたすらにわが帰路走る新幹線は

大井川・天竜川過ぎ名古屋への距離せばめゆくひかり510号

後 足 石 富 洋 子 島 根

西空に立待月の傾きて隣家の窓の一つ明るし

声出して文春読めり来る人も訪ふひとつもなく秋の日暮れて

新宿も銀座も知らずふと思ふ繁華な街に紛れてみたし

前足に飛ぶ力得しコウモリのぶらさがるためだけの後足

夜嵐に紛れ集へる神々の面会寿ぐ神在月は

メ ダ カ 川 村 秀 子 \* 奈 良

「荻、二つの違い見て歩く矢田丘陵にわが影長し

川蜷の棲みいし川を見るわれに見知らぬ男声をかけくる

バイク止め降り来し人が聞きてくる「メダカおるやろ捕つたらか」

「待つときや」と言いききすぐに戻り来し男は二つ網を手を持つ

川下の私に網を固定させ上から追い込みメダカ捕つたり

持ち帰る瓶まで用意してもらいメダカ八匹甕に飼いおり

小屋仕舞の日 磯 部 剛 \* 新 潟

谷に射す淡き光をからめ取り白く浮かび立つ山毛櫸の裸身よ

真つ暗な洞窟に独り生息す客の無き夜の雨の山小屋

径脇の観音像を抱きかかえそつと寝かしぬ小屋仕舞の日

魚野川の水に灯を落としつつスプリード上げる夕ぐれ電車

断崖の歩道を行けば甘やかに落ち葉が匂う黒部溪谷

仙人のやうな人 作 田 良 子 石 川

首里城の「向拝」飾る竜ほりし今さん偲ぶ全焼跡に

いとやさし瞳と長いひげ今さんは仙人のやうな人でありたり

今さんの彫りしトルソを購ひて床の間に在り四十年間

朝廷にエナガのファミリーらんぶする小春日和の巣箱のめぐり

夕焼が巣箱を明るくてらしそむ余市の里は猛吹雪とぞ

船舶ラッシユ 末 吉 瑠璃子 山 口

一日に五百隻ほど行き交ふとふ海峡は今朝も船舶ラッシユ

大型船行き交ふ海峡に釣舟の一艘波に揺蕩ひてゐる

警笛を鳴らし近づく貨物船に我はハラハラ小舟見てをり

コンテナを満載の船は釣舟のそばすれすれに通り抜けたる

貨物船の航跡の波に釣舟は右に左に大きく揺れたり

一人居に知る 和 田 鞆 彦 \* 埼 玉

息子逝き早や九年か妻逝きてはや八年かと指折り数う

一夏を咲き盛りいし紅赤のカンナを抜けり今日は立冬

かぎとなり棹ともなりて大空を統べるがごとく雁わたる見ゆ

暖炉燃ゆる音かすかなり猫も椅子一つ貰いて聖夜更け行く  
昼間にもさまざまの音あることを職去りし後の一人居に知る

マルメロ 安保コト 岩手

バウバウと、またかなたよりドンドトと北の外の面に唸る風音  
くれなるの飛行機雲と三日月が並びて見ゆるけふの夕焼け  
ラグビーの先導役の鳳君が南アの国家を歌ふ嬉しき  
山里の八百屋さんにて求めたるマルメロ七個香りがぐはし  
歪なるも端整なるも在りたれどマルメロ時にお多福に見ゆ

遍路 平沢 恵美子\*新潟

鈴ならし遍路をゆけば鈴の音に亡き夫の声重なり聞こゆ  
遠足の小一の子らお遍路に手を振りくれるこれが「お四国」  
みかんの実美しい中鈴ならし遍路をすれば心は和む

六十番札所に向かう山道はバス大ゆれで鈴の音にぎやか  
お四国の「結願」はたし帰りきて夫の育てし高野槇おおぐ

ピルの影 池上昌子 東京

巨大なる触手のクレーンなくなりてピルは夕べを長き影ひく  
朝顔の鉢に残りしいのちひとつちひさく咲く霜月の朝  
暮れ方のなべて影澄む晩秋の街のうつろひバスより眺む  
息ふかく吸ひつつ角を曲がりたり今年はおそき木犀の香に  
コリウスの紫紅色をぬらしつつ廻りの音を消す秋の雨

熊本城 垣野幸一\*長崎

天守閣超えて聳ゆるクレーン二基日曜のきょう空刺ししまま

立入りの禁止されいる熊本城を加藤神社の樹間よりみる  
漆喰で固めし瓦の屋根白く熊本城の青空眩し  
有明海の高苔養殖の支柱立つうえに大きな虹架かりたる  
十人が三尺おきに担ぎいる竜の胴体朝の日に舞う

猫に言ふ 風岡俊子 静岡

大嘗祭密かに明けて光りさす朝の空に富士のそびゆる  
煌々と光を放つ満月が秋刀魚焼く庭静かに通る  
指示のなき一人居暮らしの淋しさはわさびの抜けし刺身食ふごと  
語りたきことの多きを猫に言ふ鉢丸めて寝たふりの猫に  
シンデレラも白雪姫も恋で終るわが人生は恋からはじまる

巨勢路 田仲淳子 奈良

山すそに藁燃す煙は稜線をしばしば隠すわたくしの里  
傾ぐ茎からも根を出しコスモスは荒草のなか嬬やかに咲く  
庭さきに郵便受けをかこみ咲く自然のままのコスモスあまた  
雨のあとひどく濁れる裏の川わが山畑の土手崩えたるか  
田舎駅にひとり佇み存分に秋の巨勢路の夕風を浴ぶ

優しい呪文 氏家かね子 宮城

失恋も克明に告ぐる歌のあり身内のごとく応援してゐる  
北朝鮮はこはい国とぞ思ひつつ怖がる理由説明できず  
真夜起きて茶を飲みあたる亡き舅のさみしさをわが老いて知りたり  
手際良く脱ぎし衣類を枕べに舅は兵の日のままに逝きたり  
然りげ無い子の「風邪ひくなよ」を思ひをり日々を乗り切る優しい呪文  
酔ひどれの画家と言はれしユトリロのモンマルトルの風景が好き

佐渡のちや 清水晴雄 新潟

磐越道越後と磐城繋げても三里を待たず違ふ方言  
五千羽の白鳥渡来地溜池の瓢湖せまけれど平野は広し  
佐渡のちやは飲めない茶といふ(来いっちや)はおけさ踊りと海の夕映え  
異人館風見鶏舞ふティーラーのプライド高し神戸の町は  
木守柿残し梯子を仕舞ふとき淋しさ迫る冬も迫り来

小さな灯り 内田 妙熊本

月下美人誰が名付けしや佳麗なる花は開きぬ夜半のしじまを  
九十になりて始めて出会ひたり月下美人のうつつの花に  
コスモス誌に三十三年無欠詠暗中われの小さな灯り

四人目が今四ヶ月といふ人のお腹はらに手ふれ耳もあてみる  
茶の間にて令和陛下のパレードを見ればわけなき泪にじみ来  
超難度成功したる瞬間の羽生結弦の鬼神の形相

認印押す 柴田 有里\*愛知  
「その二集」特選

ばんぼんと秋の気配を受け取つてもみじが紅い認印押す  
稜線を辿る夕陽の残光で影絵を演じつつ帰る道

「しょうがない」至てをこれで片付けてしまえば介護は楽になるのか  
ニセモノの空と大地で生まれ死ぬベンギンの背は少しまるまり  
木々たちが赤や黄色の点描でスーラのように秋を塗りゆく

ダカ織りのトビ 印出 美由紀 神奈川

右の背をどすんと拳固に叩かれて初診外来に受く荒療治

血液に異状はなしと告げられて崩る痛みの正統性が  
ダカ織りのトビを冠りておだやかにバザーの売り場うりば守るをそこあり  
ネパールゆいインドへ売らるる少女らの石楠花色に染まる泪よ  
花や鳥描かれてゐていにしへの碁石は知略のこころ見せざり

文語 前中 映 東京

店先の籠に積まれたティオ・ペペも日本の夏を耐へてゐるなり  
やはらかなものに触れたい八月のペットボトルに生まれ変はつて  
立ち飲みの聖地富士屋も消え果てて夏の重機が抉る赤土  
「文語ってラテン語のようなものですか」不意に問はれて言葉に詰まる  
八月の驟雨に濡れてバラストの石それぞれの断面あらは

雨の足跡 栗山 貴臣\*福岡

夜神楽のあとでいただく豚汁のゴロゴロ入る大根と肉  
猫なれど十九年も居てくれ親との時間を少し追い越す  
暖房の風に誘われ猫も来る三畳ほどの家族団欒  
粟粒が繋がりしろき筋となる川面に浮かぶ雨の足跡  
駅前で雪吊の縄張られては一重二重と人の輪できる

さはれない海 荒川 ゆみ子 東京

品川のホテルの中に音のないさはれない海あざやかに在る  
たゆたひてあまくさくらげは搦み合ふ細く長く白い触手で  
鱈の群れりうとかはしてつまぐろは人工岩礁果てなく泳ぐ  
イグアナは静止したまま心眼でガラスの外にたたずむ人視る  
カビバラとりくがめ共に棲んでゐる 平和主義者の丸こいからだ  
イルカ翔べばアクアパークに歓声は(おーお)と放物線で響きぬ

それから君も 川越 三紀子\*宮崎

吊り下げしピンクの薔薇の花束は藤色になりカサカサと鳴る  
安直な展開なりと思いつつ子役のセリフにもらい泣きする  
秋風に足を広げたアシダカのクモの脱け殻ふんわりと舞う  
蜘蛛の巣に四肢も尾も捕られふるると哀しきヤモリは喉震わせる  
燦々と夕日を浴びて輝ける紅葉と銀杏それから君も

牛乳沸く 加藤泰子 愛知

いちめんに翳るものなき花野ゆく黄蝶の対の目映ゆし 独り  
雌日芝に三つ並びある蛭蝶かすかに翅を震はせて待つ  
秋の蚊の一つ寄りくる夕さをふはあん小さき汝とわたくし  
金平糖一つふふめばその角の円つるまも真夜中 牛乳の沸く  
さわあああ牛乳沸きて静もれる夜半の厨に幽かな雨音

流木の枝 和泉邦子 新潟

管理田が放棄田となり名も知らぬ草の上とぶ蒲の穂の絮  
ささと研ぎ炊きし新米コシヒカリ手に塩つけてはつほと握る  
いつもより遠くまで染め海に入る信濃川みゆ台風のと

セーターを解きて我れに編みくれし老いの手遊び霜降りの足袋  
鳥ならば羽やすめたし阿賀野川中州に残る流木の枝

夕暮の桜島 升金 眺 美\*鹿兒島

北風に追われて流る噴煙の中よりのぼる昼の寒月  
夕暮の赤富士ならぬ桜島雲も湾も一緒に染まる

初時雨指宿浜の露天湯に波紋の雨だれ見つつ入りたり  
桜島は巨大な噴煙ふき上げて酷灰の町を作り出したり  
青空をかすめて噴煙のぼりゆく台風迫れば流れの速し

水道水 三上 恵美子 香川

飼ひ猫の戻らぬ二夜二夜目はわれの動きの影絵めきある  
ほの温き霜月四日の水道水しまらく両の掌に受けてある  
精一杯の赤さを放つサルビアの十一月の十日のまひる  
老後を如何と問ふ人あらば伝へてよ黄のパブリカを今日は食べた  
死に急ぐこともなければ木枯しの一号が吹く日はせかされる

急ぐ 川島 夏樹\*宮城

足たちは生あるかぎり限りなく軀を支える動く土台だ  
足音がひたひたひたと離れないいつでも足に従う足音  
見送って見詰めるだけだひとつにはなれないままの二本の線路  
冬ちかい午後の日向の身のどこか急ぐさびしい川がせせらぐ  
あの頃は乗り合い自動車走ってたがたごと田舎の枯れ野の径を

嘴と牙 水辺 あお 静岡

右岸行けば左岸にをりし鴨のやつ左岸を行けば右岸にをりぬ  
朝の鴨見てきてひとり飯食へり仲間はずれの鴨のごとくに  
温暖化加速に皆が加担して不平等なる決壊被害  
サイレントキラーのごとく雨降りり人影あらぬ被災地の上  
避難所の門に入らず放浪のキリストも仏陀も孔子らもまた  
壮年を終へ老年に向かふ身の氣づけばあらぬ嘴と牙